

『病草紙』制作と後白河法皇の思想

日本医史学雑誌第五十一巻第四号 平成十七年五月十四日受付
平成十七年十二月二十日発行 平成十七年十月 三日受理

小山 聡 子

浜松医科大学医学部総合人間科学講座歴史学教室

〔要旨〕『病草紙』は、一二世紀後半に後白河法皇の命令によって、六道絵の一つとして制作された絵巻物である。本稿では、『病草紙』の制作意図と後白河法皇の思想の関係について検討した。先行研究では、『病草紙』が六道絵の一つであることから、その宗教的側面を強調してきた。それに対して本稿では、詞書や絵の分析を通して、『病草紙』における宗教性の稀薄さを指摘し、後白河法皇は人道の苦しみを必ずしも実感してはいなかったということを明らかにした。さらに本稿では、『病草紙』「鼻黒親子」の病名やその描かれた意図についての分析を通して、『病草紙』には病者を差別視する視点が込められている点を明確にした。『病草紙』は、後白河法皇の、病者に対する差別視や猟奇的趣味、さらには芸術に対する異常なまでの好奇心によって、はなはだ異色な人道の絵巻物として制作されたのである。

キーワード——『病草紙』、後白河法皇、六道絵、鼻黒親子、病氣観念

はじめに

『病草紙』は、後白河法皇（一一二七―一一九二年）の命令によって制作されたと考えられる絵巻物である。後白河法皇は、非常に熱心な絵巻物の収集家であり、自らの宝蔵であった蓮華王院に多くの絵巻物を収蔵していた。たとえば蓮華王院には、『年中行事絵巻』や『後三年合戦絵』、『粉河寺縁起絵巻』、『伴大納言絵詞』、『源氏物語絵巻』をはじめとする多くの絵巻物が収蔵されていたと考えられる¹⁾。

後白河法皇が制作させた絵巻物の一つである『病草紙』は、「白子の女」（白皮症）や「二形の男」（半陰陽）、「霍乱の女」（急性胃腸炎）など、日常から見られる病気や珍奇な病気にかかった人間の姿が描かれている。興味深いことに、『病草紙』に描かれている病気の大半は、医学書『医心方』（九八四年成立）に記されている病気と一致している²⁾。おそらく『病草紙』は、医師や僧侶など、病気治療に精通していた者の目を通して上で制作されたのである³⁾。

先行研究では、『病草紙』は『地獄草紙』『餓鬼草紙』と一連の作品であり、六道絵のうちの人道の箇所について表現した絵巻物であるとされてきた。つまり『病草紙』は、人間の苦しみの世界を表現した絵巻物だということになる。ちなみに六道絵とは、天道、人道、阿修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の六道の世界を描いた絵のことである。源信の『往生要集』（九八五年成立）以降、皇族や貴族のみならず一般庶民も、六道から脱して極楽往生を遂げることが切望していた。たとえば藤原頼通は、阿弥陀仏を観想して極楽往生を遂げようと考え、宇治の平等院に阿弥陀仏像を安置した³⁾。阿弥陀仏の来迎する様子を演じる迎講には、河原者と呼ばれた人々も積極的に参加していたようである。さらに興味深いことに、当時の社会では、六道の世界を凝視することによって欣求浄土の念を高めようとする動きもあった。そこで盛んに描かれたのが、六道絵ということになる。

さて、『病草紙』『地獄草紙』『餓鬼草紙』については、いずれも一八〇年代末の制作だと考えられており、その画風や書風、体裁、伝来経緯における類似点もすでに指摘されているところである。さらにこれらの絵巻物は、六道絵として後白河法皇が作らせたものだとされてきた。たしかに当時においては、絵巻に使用する絵の具や紙は大変高価であった。したがって、これほどの優品を制作させることができた者は、中央にいるごく限られた人物であったことになる。その上、後白河法皇は、常軌を逸するほどの熱心な絵巻物収集家でもあった。これらのことから総合的に考えると、『病草紙』『地獄草紙』『餓鬼草紙』は、六道絵として一連の作品であった可能性が非常に高いといえよう。

ただし『病草紙』は、人道の苦しみを表現した絵巻物であるにもかかわらず、病人に対する同情心を積極的に表現していない。たとえば、『病草紙』の「風病の男」(眼球震盪症)では、眼球が震えるために手も震えてまともに碁をさすことができない男に対して、嘲笑する女の姿が描かれている。さらに「白子の女」でも、白髪白面の女に対して周囲の者たちが大きく口を開けて笑っている。「白内障の男」(白内障)では、その手術の様子を襖の間から覗き見している女が物見高そうな微笑みを浮かべている。

つまり『病草紙』は、必ずしも醜く穢れた人道を描いて厭離穢土や欣求浄土の念を高めようという目的のもとに描かれたものではないのではないだろうか。『病草紙』からは、猟奇的趣味のもとでグロテスクなものや珍奇なものを鑑賞して楽しむとする姿勢すらも感じ取ることができるのである。『病草紙』の制作を命じた後白河法皇は、どの程度の現実感を持って厭離穢土の念を抱いていたのであろうか。さらに彼は、いかなる視点に立って『病草紙』を作らせたのであろうか。

現在までの宗教史研究では、宗教的な絵画や彫像には切実な信仰心が込められていることを前提として進められてきた。たしかに通常の場合、宗教的な絵画や彫像は、それらを制作させた人間やそれらを鑑賞する人間に篤い信

仰心があるからこそ制作されるはずである。ただし『病草紙』からは、必ずしもそのような切実な信仰心を感じ取ることができないのである。宗教的な絵画・彫像と宗教、さらにはそれらと人間との関係とは、どのようなものであろうか。

さて、『病草紙』についての先行研究は、主に歴史学と医学を専門とする研究者によって行なわれてきており、『病草紙』と六道絵の関係や『病草紙』に描かれているいくつかの病気についても明らかにされてきた。ただし先行研究では、歴史学及び医学における相互の研究成果を有効的に活用してきたとは必ずしも言い難い。それによって、『病草紙』の制作意図についても明確にはされてこなかったのである。『病草紙』の制作意図は、歴史学と医学の視点から総合的に検討しない限り、明らかにしなれないであろう。そこで本稿では、歴史学と医学双方における研究成果を踏まえた上で『病草紙』の制作意図について考察していきたい。

本稿では、まず『病草紙』の宗教性について検討していきたい。多くの先行研究では、『病草紙』を六道絵の一つとして位置づけ、その宗教的側面を強調してきた。しかし、はたして『病草紙』は、それほどまでに宗教性の強い絵巻物なのであろうか。現在までの研究では、後白河法皇の信心深さがしばしば注目されてきた。しかし、後白河法皇は、先行研究で強調されてきたほどまでに、篤い信仰心の持ち主だったのであろうか。『病草紙』の制作意図については、後白河法皇の思想を明確にしない限り明らかにはならないのである。さらに本稿では、「鼻黒親子」と呼ばれる一枚の絵に着目したい。現在までの研究では、「鼻黒親子」の病名については様々な見解があるものの中に取り入れられる必要があったのかということについても論じ、『病草紙』の特質について論じていくこととする。

一、『病草紙』における厭離穢土の念の希薄さ

『病草紙』の持つ宗教的側面については、現在までの研究でも論じられてきた。たとえば佐野みどり氏は、『病草紙』は、病悩という生々しく現実的な題材を取り上げることによって仏へ結縁するための手がかりを得ようという発想のもとに制作された絵巻物であるとしている。⁸⁾『病草紙』についての先行研究は、佐野みどり氏の研究をはじめとして、宗教との強い結びつきを強調する傾向にある。それは、『病草紙』が六道絵の一部分として描かれたからであらう。

ただし『病草紙』は、病人しか描かれていないという点で、数ある六道絵の中でもはなはだ特異である。たとえば聖聚来迎寺所蔵『六道絵』（鎌倉時代中期制作）における人道の箇所は、仏教でいうところの四苦（生・老・病・死）と八苦（四苦と愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五盛陰苦）に基づいて描かれている。具体的に述べると、そこには、美しい女性の屍が野に捨てられ腐敗していく様子や武士が愛する家族と別れて戦場へと向かう場面、そして憎悪の念をむき出しにして殺しあう合戦の場面や貧者の様子、などが鮮明に描かれている。また、死を免れることができない仙人や屠所に引かれていく牛などは、人道の無常を表現しているといえよう。さらに、北野天満宮所蔵『北野天神縁起絵巻』（一三世紀制作）でも、お産や物の怪退治、葬送、病者などが描かれており、人道の苦しみが広く表現されているのである。

つまり多くの人道の絵では、病者の絵のみではなく、人間をめぐる様々な苦しみそのものを描いているといえよう。それに対して『病草紙』には、病者の姿しか描かれていない。『病草紙』は、この点において、他の人道の絵と比べてはなはだ特異である。⁹⁾これは、『病草紙』を描かせた後白河法皇の猟奇的な趣味によるものでもあるのであろう。

さらに興味深いのは、『病草紙』の詞書である。まず、地獄道を描いた『地獄草紙』の詞書と餓鬼道を描いた『餓

『鬼草紙』の詞書は、それぞれ『正法念処経』や『起世経』、『孟蘭盆経』をはじめとする種々の經典に則って記されている。經典に則っているのは、詞書だけではない。絵についても、經典に従って描かれている。このことは、宗教的な意味合いを持つ絵画としては当然のことである。

それに対して『病草紙』の詞書は、諸々の經典とは全く関係がない。たとえば「不眠症の女」の詞書は以下のとおりである。

山とのくにかつら木のしものこほりに、かたをかといふところに女あり。とりたて、いたむところなければども、よるになれども、ねいらるゝことなし。よもすがら、おきゐて、「なによりもわびしきことなり」とぞいひける。¹⁰⁾

このように『病草紙』の詞書は、いずれの經典にも則ってはおらず、はなはだ説話的に記されているのである。ちなみに『往生要集』の人道の項では、『大宝積経』を引用して、人間の不浄や苦しみ、無常について説かれている。人間の苦しみとしての病気については、『中阿含経』七や『大宝積経』五七、『大智度論』八にも説かれており、様々な經典や注釈書で述べられているところである。それにもかかわらず、『病草紙』の詞書は、經典や注釈書に沿って書かれていない。この点は、『病草紙』が宗教絵画としてはなはだ特異であることを示しているであろう。『病草紙』に宗教性が希薄である点は、すでに樋口誠太郎氏も指摘しているところである。樋口氏は、『病草紙』は宗教性が希薄な絵巻物であり、世俗的かつ珍奇なものを描くという目的を持っている報道画的特質を持つ絵であるとしている。

前述したように、『病草紙』では病人への同情を表現してはいない。このことから、後白河法皇は、宗教的絵画を作るといふよりは、病人を少しでもグロテスクかつ滑稽に描かせ、それを見て楽しむことに執心していたといえるであろう。

近年の加須屋誠氏の研究では、『病草紙』は、病気に対する偏見や性差別、階級的偏見をもとに作られているので

はないかと指摘されている¹²⁾。確かに『病草紙』には、病人を嘲笑する様子が多く描かれているし、「陰虱の男」や「痔瘻の男」、「二形の男」は庶民や芸能者として描かれている。「病草紙」には、貴族の男性による差別視的視点も組み込まれているのである。とすると、『病草紙』の宗教性は、詞書だけではなく、絵の部分についても、希薄であるといえよう。少なくとも、後白河法皇は、人道の苦しみについて、自らの問題ではなく、一般庶民の問題として取り上げているのである。このような感覚は、かつての菅原道真にも共通するものがある。道真は、粗野で貧しい民衆について、前世の宿業によつてこのような惨めな生活を送らざるをえなくなっていると考え、彼らには仏名会での懺悔が必要だと考えていた。¹³⁾

ただし、『病草紙』の制作を命じたとされる後白河法皇は、熊野参詣を三四回も行ない、大変信心深い一面も持っていた。さらに彼は、尋常ではないほどまでに今様の魅力にとりつかれ、今様を謡いすぎたために喉を腫らし湯水も飲み込めなくなったほどであった。今様とは、当時における流行歌であり、後白河法皇にとつて神仏との交感を意味していたようである。法皇は、『梁塵秘抄口伝集』一〇において以下のように述べている。

神社に参りて今様謡ひて示現を被る事、度々になる。一々此の事を思ふに、声足らずして妙なる事無ければ、神感有るべき由を存ぜず。唯年来嗜み習ひたりし却の致すところか。又殊に信を致して謡へる信力の故か。(中略)我が身五十余年を過し、夢の如し。既に半ばは過にたり。今は万を抛げ棄てて、往生極楽を望まむと思ふ。仮令又今様を謡ふとも、などか蓮台の迎へに与からざらむ。其の故は、遊女の類、舟に乗りて波の上に泛び、流れに棹をさし、着物を飾り、色を好みて、人の愛念を好み、歌を謡ひても、よく聞かれんと思ふにより、外に他念無くて、罪に沈みて、菩提の岸に到らむ事を知らず。それだに一念の心発しつれば往生しにけり。まして我等はとこそ覚ゆれ。法文の歌、聖教の文に離れたる事無し。¹⁴⁾

このように後白河法皇は、今様による神の示現も自らの信心によるものだとしている。このことは、いかに後白

河が信心深かったかということを示しているであろう。彼は、常日頃より仏道に帰依しているという自覚を持っており、自らの極楽往生を確信していたのである。その上で後白河は、今様の中の法文歌や聖教からも離れたことはないとしている。

しかしその一方で、藤原兼実は、日記『玉葉』文治三年（一一八七）四月九日条において、後白河法皇の行動について次のように述べている。

又近日有^一往生要集談義^一、澄憲法印已下五人学生預^二其事^二云々、法皇年来、曾不^レ知法文之行方^一、況於^二義理論議^一哉、而臨^二此御悩時^一、忽然而有^二此議^一、足^レ為^レレ奇、是又物恠歟^⑤、

藤原兼実は、後白河法皇の近臣ではあったものの、かねてより法皇とは対立しがちであり、管弦の遊びや今様に尋常ではないほど傾倒していた法皇の態度についても批判的に見ていた。『病草紙』の制作は、一一八〇年代だと推定されている。『病草紙』は、その宗教性の希薄さからも、この文章が書かれた時期より若干前の作品だったのであろうか。兼実によると後白河法皇は、日頃は經典などそっちのけで今様や管弦にうつつを抜かしていたことになる。兼実は、その後白河法皇が突如として『往生要集』の談義を行なうと言い出したので、心の底から驚いたのである。このとき後白河法皇は、病床に臥したことによって、来世への不安を現実的なものとして感じ、念仏の指南書である『往生要集』の談義を開くことにしたのであろう。『往生要集』には、極楽往生するためには常日頃かたどのようにな念仏を行なえばよいか、さらには臨終時にはいかにして念仏を行なうべきかが詳細に記されているのである。

こうなると、後白河法皇の『梁塵秘抄口伝集』（一一七九年成立）にある「聖教の文に離れたる事無し」ということも疑わしくなってくる。後白河法皇は、確かに篤い信仰心を持っていた。ただしその信仰心は、しばしば芸術と不可分の傾向にあり、必ずしも經典そのものへと向けられていたものではなかったのではないだろうか。それだけか

らこそ後白河法皇は、地獄道と餓鬼道という未知の世界については經典を用いて描かせたものの、既知の世界である人道には持ち前の猟奇的な芸術趣味を存分に活かしたのではないだろうか。ちなみに『地獄草紙』や『餓鬼草紙』についても、芸術的に大変高く評価されており、観念的かつ滑稽な一面すらあると指摘されているところである。¹⁶⁾

前述したように、宗教的絵画や彫像には、とかく切実な信仰心が込められていると考えられがちである。それゆえ多くの研究では、そのような作品の存在によって、その時代の信仰が熱烈なものであったかのように論じられる傾向にある。たとえばこの時代には、地獄絵や六道絵、来迎図などが数多く描かれた。しかしだからといって、それらの全てが切実な信仰心のもとに制作されたとは、単純にはいえないのではないだろうか。要するに、必ずしも全ての宗教的な作品が神仏への結縁を促すために制作されたのではなく、その芸術性を楽しむ傾向もあつたのではないかと考えられるのである。少なくとも『病草紙』には、後白河法皇の厭離穢土の念があまり表現されておらず、まずそこには珍奇なものへの強烈な好奇心があり、グロテスクなものや滑稽なものを芸術的に楽しむといった目的もあつたと推定できるのである。¹⁷⁾

二、「鼻黒親子」の病名

『病草紙』の中に、「鼻黒親子」という絵がある。本章では、「鼻黒親子」の病名について、先行研究をふまえた上で検討していきたい。また、次章では、本章の分析をもとに、「鼻黒親子」が『病草紙』の中に取り入れられた理由を考察し、『病草紙』の制作意図についても論じていくこととする。

まずはじめに、「鼻黒親子」の詞書から見えていくことにする。

大和国平群のこほり、幸山といふところに、おとこあり。はなのさき、すみをぬりたるやうにくろかりけり。



「鼻黒親子」⁽¹⁹⁾

子孫子、あひつぎて、みなくろかりけり。⁽¹⁸⁾

『日本の絵巻』では、詞書に「はなのさき、すみをぬりたるようにくろかりけり」とあるにもかかわらず、この絵に「赤鼻の父子」という題名をつけている。⁽²⁰⁾ その理由は、当時において赤鼻という病気が実際にあったからであろう。ちなみに『和名類聚抄』(二〇世紀前半成立)にも、赤鼻という病気について記されている。

実際のところ先行研究でも、赤鼻が黒ずんでみえたからこのように描かれたのではないかと解釈されている。たとえば服部敏良氏は、ほくろの可能性もあるとしながらも、酒皰ではないかという見解を述べている。⁽²¹⁾ 酒皰というのは、中年に多く見られる慢性の炎症のことであり、特に眉間や鼻部、頬などの顔面に好発する病気のことである。ただし酒皰は、赤くはなるものの黒ずむことはない。したがって「鼻黒親子」の病気は、酒皰ではないことになるであろう。ちなみにほくろは、体質が遺伝することはあっても、同じ場所に出るといふことは非常に稀である。また、荻野篤彦氏は、「鼻黒親子」について、現代の医学では理解しがたい絵であり、鼻に墨を塗る大和の風習を聞き、間違えて描いたものである可能性もあるとしている。⁽²²⁾ しかしそうであるのならば、なぜ一家の母親の鼻は黒く描かれなかったのであろうか。荻野氏の説については、このような疑問点が残る。

では、「鼻黒親子」の病名とはどのようなものであろうか。まず着目したいのは、画面の手前に描かれている

二人の子供が持っている石榴である。この石榴は、意味もなく描かれたのではなく、「鼻黒親子」の病名を示す指標だと考えられる。実は、鼻が黒くなりかつ石榴のような形状にもなり得る病気としては、基底細胞癌が考えられる。²¹⁾ 基底細胞癌というのは、一般的に頭顔頸部、とりわけ下眼瞼や鼻唇溝、鼻翼に好発する皮膚癌である。²²⁾ 基底細胞癌の初期像は、黒紫色丘疹であり、ほくろのようにもみえる。その丘疹は、次第に大きさや数を増していくようになる。そして丘疹の中心には、やがて潰瘍が生じることもあるのである。基底細胞癌となった皮膚の表面は、蠟様光沢や黒真珠様光沢と表現されることが多い。また、基底細胞癌の患部の境界線は、はなはだ鮮明である。これらの点も、「鼻黒親子」の症状に酷似しているといえよう。

基底細胞癌は、中年以降に好発する病気である。ただし基底細胞癌は、症候群のかたちをとることが多く、基底細胞癌症候群といって、その体質が遺伝し発症することもしばしばあるのである。したがって子どもも、幼いうちから基底細胞癌になることもある。基底細胞癌の誘因の一つは、日光曝露や寒冷刺激などである。たとえば現在でも、漁師や大工の職を五〇年間勤めたことが誘因となつて基底細胞癌が発症したという症例を確認することができる。²³⁾

さて、『病草紙』が描かれた一二世紀後半、武士や一般庶民は、紫外線を浴びる頻度も高かつたはずであるし、冬などは底冷えのする家屋に住んでいたことであろう。それに対して貴族たちは、日光を直接的に浴びる機会はあまりなく、庶民に比べると格段に良い造りの家屋に住んでいたはずである。基底細胞癌は、その誘因が日光曝露や寒冷刺激であることから考えると、当時においては貴族以外の人々がかかる可能性がある病気だったのでないだろうか。日光をあまり浴びることのない貴族たちにとっては、基底細胞癌は特に珍しい病気だったと推定できる。

二、後白河法皇の病氣観念

それでは、なぜ「鼻黒親子」の絵は、あえて『病草紙』の中に取り入れられたのであろうか。まずは、当時において鼻に色がついている人間がどのようなイメージで捉えられていたのかという点について検討していきたい。

『源氏物語』（一一世紀初期成立）「末摘花」では、末摘花という名前で呼ばれる姫君の話が語られている。末摘花は、常陸宮の姫であり申し分のない家柄の出であったものの、父常陸宮の死により貧しさに苦しんでいた。その貧しさは、末摘花の周囲を取り囲む女房たちが底冷えのする部屋の片隅で彼女の残飯を食べなければならぬほどであったという。そんな折、光源氏は、末摘花の美貌についての噂を聞きつけ、持ち前の想像力をかきたてて熱烈な恋をし、実にしつこくかき口説くこととなる。光源氏は、ようやく自らの思いを強引に遂げた後、朝の光の中で末摘花の醜い容貌を目にして仰天してしまった。彼女の容貌については、『源氏物語』において次のように語られている。

うちつぎて、「あな、かたは」と見ゆる物は、御鼻なりけり。ふと、目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、さきの方すこし垂りて、色づきたる事、ことの外に、うたてあり。色は雪はづかしう白うて、真青に、額つき、こよなうはれたるに、なほ、下がちある面やうは、大方、おどろおどろしう、長きなるべし。^五

末摘花の鼻は、長くて先のほうが垂れており、しかも赤かったということである。ちなみに史料中の「普賢菩薩の乗物」とは、赤い鼻を持つ白像のことである。末摘花は、『源氏物語』の中で、世間知らずで純粋な一面を持つものの少々滑稽な女性として語られている。

さらに『信貴山縁起絵巻』（一二世紀末期成立）「延喜加持巻」では、勅使が信貴山に派遣される場面において、鼻の赤い老人の姿が描かれている。この老人は、烏帽子をかぶっていないので、牛飼童や大童子といった下仕えの

童子なのであろう。²⁷彼は、道端で、天皇が病気になったことについての噂話に興じているようである。おそらく老人の赤い鼻は、彼が下賤の者であることを示す一つの指標なのであろう。鼻が赤く腫れている老人の姿は、絵巻物を見る者にとっては、天皇とは別世界に生きる人間であるかのように映ったはずである。

また、『今昔物語集』二八一—二二「左京大夫□□、付異名語」では、零落してしまった親王の息子、左京大夫についての話が語られている。この左京大夫の容姿については「長少シ細高二テ、極ク□ヤカナル様ハシタレドモ、有様・姿ナム嗚呼也ケル。頭ノ鎧頭也ケレバ、頸ハ背ニ不付ズシテ、離レテナム被振ケル。色ハ露草ノ花ヲ塗タル様ニ青白ニテ、眼皮ハ黒クテ、鼻鮮ニ高クテ色少シ赤カリケリ」と²⁸とされている。これによれば、左京大夫は、上品な様子をしてきたものの、動作や姿が抜けており滑稽だったということである。興味深いことにこの説話では、滑稽な要素の一つとして、鼻の色が赤みがかっている点²⁹があげられている。

さらに、『今昔物語集』二八一—二〇「池尾禪珍内供鼻語」は、「鼻ノ長カリケル、五六寸許也ケレバ、頷ヨリモ下テナム見エケリ。色ハ赤ク紫色ニシテ、大柑子ノ皮ノ様ニシテ、ツブ立テゾ黻タリケル」という容姿を持つ池尾禪珍内供の説話である。禪珍内供は、粥などを食べる時には弟子の法師や童子に三〇センチばかりある平らな板を持たせ、鼻の下に差し入れさせていたという。ある日、童子は、よそ見をしてしまったために粥の中に禪珍内供の鼻を不覚にも落としてしまった。大いに怒った禪珍内供は、童子を叱り飛ばした。すると童子は、「世ニ、人ノ此ル鼻ツキ有ル人ノ御バコソハ、外ニテハ鼻モ持上メ。嗚呼ノ事被仰ル、御房カナ」と³⁰いう捨て台詞を吐き、立ち去ったという。このことについて『今昔物語集』の著者は、「此レヲ思フニ、実ニ何カナリケル鼻ニカ有ケム。糸奇異カリケル鼻也。童ノ糸可咲ク云タル事ヲゾ、聞ク人讚ケルトナム語り伝ヘタルト也」と³¹と結んでいる。

このように鼻が色づいているということや鼻の形が変わっているということは、絵画や物語、説話において、滑稽さや貧しさを表現する指標の一つであったと考えられるのである。一般庶民をはじめとして貧しさに苦しんだ

人々は、炭を満足に焚くこともできず、隙間風が入る家を修理することもできず、さらには日光の曝露を受ける生活形態をとることが多かった。このような生活形態をとる人々は、貴族たちよりも、赤鼻になったり基底細胞癌などの病にかかる確率も高くなることであろう。後白河法皇は、貴族の間ではあまり見られない病気を『病草紙』の中に取り入れることによって、庶民の罪業の深さを表現したのではないだろうか。

さらに、「鼻黒親子」において着目しなければならぬ箇所は、父親の後ろに描かれている矢である。ここに描かれている矢は、この黒い鼻をした父親が武士であることを示しているであろう。彼は、住んでいる家の様子から、下級武士なのであろう。

とすると「鼻黒親子」は、単に庶民の罪業を示すのみではなく、殺生を生業とする人間の罪業を表現している絵ではないかと推定できる。殺生の罪によって病気になる話は、さまざまな説話や往生伝に頻繁に登場するところである。たとえば『宇治拾遺物語』（鎌倉時代初頭成立）三一一二では、殺生を生業としていた者が、その罪によって病気になるひびく患って死んだ話がある。さらに『大日本国法華経験記』（一〇四〇―一〇四四年成立）八六では、殺生の罪によって蛇になってしまった者の話が記されている。ちなみにこの説話では、蛇になってしまったことを病になったと捉えている。

また、「鼻黒親子」においては、一家の母親の鼻だけが黒くない。一方、絵巻中に描かれている三人の子どもたちは、いずれも男児だと推定でき、父親と同様に黒い鼻を持っている。^(註)この点についてはまず、一家の母親は、殺生の罪を犯していない点で一家の父親と異なっている点を指摘することができる。それに対して、子どもたちはどうであろうか。確かに彼らは、まだ殺生の罪を犯してはいない。しかしこの子どもたちは、いずれ父親の跡を継いで同じように武士となり、殺生を生業とする可能性が高いであろう。

その上興味深いことに、当時においては、仏罰を犯した者の家族が病気になるとする観念があったようである。

たとえば『大日本国法華経験記』六六では、ある法華持経者を誹謗中傷した男の妻が病気になるたとされているのである。このように「鼻黒親子」は、実際の病人の姿をそのまま記録しただけではなく、殺生の罪が本人のみならず家族にも及ぶという当時の常識を反映して描かれた絵だともいえるのである。

以上のように「鼻黒親子」は、殺生を生業とする家族についての絵であり、必ずしも人道の苦しみを描いたものではない。加須屋誠氏の指摘するように、確かに『病草紙』は差別視の観点のもとに描かれている。⁽³³⁾ 後白河法皇及びその周囲を取り巻く貴族にとつては、『病草紙』の世界は完全な他人事なのである。当然、後白河法皇や周囲の貴族たちも、しばしば病気にかかり、苦しんでいた。病というものは、平等に人間に襲いかかってくるものである。実際のところ、彼らは、自らの日記に、自分の病状や周囲の人間の病状をしばしば目を背けたくなるような表現で記している。たとえば藤原道長は、膿や排泄物にまみれて息をひきとつた。⁽³⁴⁾ ただし、実際のところはそうであつても、彼らには、罪業深いのは高貴な身分を持つ自分たちではないという観念が根強くあつたのである。このことは、仏名会での懺悔は罪業深い庶民に必要なものであるとした菅原道真の観念と共通したものである。⁽³⁵⁾

前述したように、後白河法皇は、一見信心深い人物には見えるものの、経典や仏教書そのものへの興味はさほど持っていなかった。彼は、自らが病気になる死が現実の問題として身に迫つてはじめて、『往生要集』そのものに興味を持ったのである。それまでは彼は、あくまでも芸術的興味のもとに死後の世界への関心を抱き、絵画を描かせていたと考えられる。

ただし、『病草紙』の視点は、ただ単に一般庶民や女性を差別しているものではないと考えられる。というのは、『病草紙』の「白子の女」において病人を嘲笑しているのは、貴族ではなく一般庶民である。さらに「肥満の女」でも、彼女に対して冷たい視線を投げかけているのは、男性ではなく女性である。その上、「風病の男」でも、眼球が震える男を笑うのは女性である。もしも『病草紙』の視点が一般庶民や女性のみを差蔑視するのみのものであるの

ならば、病人を嘲笑するのは貴族や男性でなくてはならないであろう。おそらく『病草紙』を鑑賞していた後白河法皇やその周辺の人物は、嘲笑する側の庶民や女性と同じ視点に立ち、滑稽かつグロテスクなこの絵巻物を楽しんでいたはずである。したがって『病草紙』には、必ずしも一般庶民や女性への差別ばかりが込められているとはいえないのである。

注意しなくてはいけない点は、『病草紙』の制作を命じた後白河法皇が、病者を完全な他者として位置づけており、自分には直接関係がない者であるかのように描かせている点である。そこには、ただ単に一般庶民や女性への差別というよりは、むしろ病人への差別が込められているように思う。そして後白河法皇にとっては、その病人は、自らではなく自らの周囲にいる者でもない。そこには、グロテスクな症状や滑稽な症状を出す病気になるのは身分の低い庶民や芸能者であるべきだという考え方が³⁶ある。その理由は、当時において、病氣と仏罰が強く結びつけて考えられていた点をあげることができであろう。後白河法皇は、前述した菅原道真と同様に、庶民は前世において罪を犯したからこそ貧しく惨めなのであり、病人についても前世もしくは現世において何らかの仏罰によって病気になるという考えを持っていたのではないだろうか。それだからこそ「鼻黒親子」では、その父親は下級武士として描かれ、子どもたちの鼻まで黒く描かれているのである。

おわりに

本稿では、まず、六道絵の一つである『病草紙』において厭離穢土の念が稀薄である点を指摘した。宗教的意味合いを持つ絵画や彫像は、とかく切実な信仰心のもとに制作されたと考えられがちである。たとえば六道絵については、「六道絵の制作→厭離穢土→欣求浄土」という図式で捉えられがちである。しかし『病草紙』のように、宗教的意味合

いを持つはずの絵画でも、制作者の芸術への強い関心や猟奇的趣味のもとに、宗教的側面はあまり強調されずに滑稽さや不気味さを強調して描かれているものもあるのである。後白河法皇や貴族たちは、六道絵を見てただ単に厭離穢土の念を持つのではなく、宗教に対して多少の距離を持ち客観的なまなざしを投げかけてもいたのである。

さらに本稿では、『病草紙』の中でも「鼻黒親子」に着目し、「鼻黒親子」は基底細胞癌を描いた絵である可能性があることを述べた。基底細胞癌の誘因は、日光曝露や寒冷刺激である。それゆえ基底細胞癌は、平安時代においては、貴族ではなく庶民がかかる可能性があった病気だったと考えられる。貴族たちは、黒い鼻をした庶民を目にし、あるいはそのような庶民がいることを噂で耳にし、さぞかし不可思議の念を持ったことであろう。つまり、庶民と仏罰の関係を示すには、「鼻黒親子」の絵は、大変効果的だったと考えられるのである。

さて、加須屋誠氏は、『病草紙』には一般庶民や女性への蔑視が込められていると指摘している。確かに加須屋氏の指摘するように、『病草紙』には、高貴な身分の男性は一人も描かれていない。この絵巻物に描かれている病者の多くは、一般庶民や当時において差別視されがちであった芸能者である。しかし『病草紙』では、病気になった男性を嘲笑する女性の絵も多く確認することができるし、病気にかかった芸能者を笑う庶民の絵も描かれているのである。それゆえ『病草紙』の鑑賞者であった後白河法皇やその周辺の貴族たちは、病者を嘲笑する女性や庶民の側に立ってこの絵巻を鑑賞していたと考えられる。このことから『病草紙』には、ただ単に一般庶民や女性を蔑視する視点が込められているとはいえないであろう。『病草紙』では、一般庶民や女性を差別視しているのではなく、あくまでも珍奇な病気にかかった人間を差別視しているのである。後白河法皇にとっては、このような病気にかかる人間は、自らとは直接的に何ら関係のない庶民であるべきだったということである。

『病草紙』における病者が貴族以外の庶民として描かれた理由は、当時における貴族たちの病気観念と関係するのであろう。彼らは、前世や現世における仏罰と病気とは密接にかかわるものだと考えていたのである。貴族たちは、

一般庶民は前世で悪業を働いたために、現世で惨めで貧しい生活を送らなければならないのだと考えていた。つまり一般庶民の貧窮や病気は、前世もしくは現世における罪業によるものだと判断されていたのである。ちなみに「鼻黒親子」における一家の父親は、下級武士の姿で表現され、殺生の罪業があることを暗示されている。

後白河法皇は、六道絵のうち人道の様子を表現した絵として『病草紙』を描かせたものの、自ら人道の苦しみをあまり実感してはいなかった。それだからこそ『病草紙』には、自分やその周辺には直接的にかかわることのない人間が描かれているのである。以上のことから『病草紙』は、後白河法皇のこのような考え方とその猟奇的趣味、さらには芸術に対する異常なまでの好奇心により、異色な人道の絵巻物としてこの世に生み出されたと考えられるのである。

謝辞 本稿を執筆するにあたっては、浜松医科大学眼科学講座の堀田喜裕教授と同大学皮膚科学講座の瀧川雅浩教授からのご教示を得ることができた。さらに、浜松医科大学医学部医学科四年の平田希美子さんには、「鼻黒親子」の分析を手伝っていただいた。堀田喜裕教授と瀧川雅浩教授、平田希美子さんに、心より篤く御礼申し上げます。また、『病草紙』『鼻黒親子』の本稿への掲載を快諾してくださった所蔵者の方と中央公論新社にも御礼申し上げます。

注と参考文献

- (1) 竹居明男「蓮華王院の宝蔵——納物・年代記・絵巻——」古代学協会編『後白河院——動乱期の天皇——』四三二、四五八頁、吉川弘文館、東京、一九九三年。
- (2) 杉立義一「『医心方』と病草紙」『日本医史学雑誌』三八巻二号、二九〇～二九二頁、一九九二年。小山聡子『病草紙』

- の虚構性」『年報日本史叢』二〇〇五年度、二〇〇五年、掲載予定。
- (3) 平安時代における救済の構造については、小山聡子『護法童子信仰の研究』一五、七五頁、自照社出版、京都、二〇〇三年、を参照のこと。
- (4) 小山聡子「中世前期における末法思想——その歴史的意義の再検討——」『史境』四三巻、二一、三九頁、二〇〇一年。
- (5) 秋山光和「地獄草紙・餓鬼草紙・病草紙の絵画」家永三郎編『新修日本絵巻物全集』(七 地獄草紙・餓鬼草紙・病草紙) 一四、二四頁、角川書店、東京、一九七六年。古谷稔「餓鬼・地獄・病草紙の詞書の書風」小松茂美編『日本絵巻大成』(七 餓鬼草紙・地獄草紙・病草紙・九相詩絵巻) 一五三、一六四頁、中央公論新社、東京、一九七七年。小松茂美「餓鬼・地獄・病草紙と六道絵」小松茂美編『日本絵巻大成』(七 餓鬼草紙・地獄草紙・病草紙・九相詩絵巻) 一三四、一四七頁、中央公論新社、東京、一九七七年。
- (6) 加須屋誠「鼻黒の男」とは誰か?——病草紙の世界観——」同『仏教説話画の構造と機能』二七七、三〇二頁、中央公論美術出版、東京、二〇〇三年。
- (7) たとえば医学の立場から『病草紙』に描かれた病気について検討した研究として、以下のものをあげることができる。服部敏良『平安時代医学史の研究』九七、一〇五頁、吉川弘文館、東京、一九五五年。酒井シヅ『日本の医療史』八九、九四頁、東京書籍、東京、一九八二年。横田敏勝『名画の医学』二、四六頁、南江堂、東京、一九九九年。
- (8) 佐野みどり「病草紙研究」同『風流造形物語——日本美術の構造と様態——』五二五頁、スカイドア、東京、一九九七年。
- (9) ただし南都には、片岡絵と呼ばれる六道絵があった。片岡絵の中の人道は、『実隆公記』文明一〇年(一四七八)三月二六日条によれば、「病苦之躰」が描かれていたということである。
- (10) テキストは、前掲註五、小松茂美編書、九八頁による。
- (11) 樋口誠太郎「絵巻物に描かれた日本の医療」『日本医史学雑誌』二〇巻一号、一五一、一六三頁、一九七四年。
- (12) 前掲註六、加須屋誠論文。加須屋誠「病草紙研究——「美術史」と「他者」——」同『仏教説話画の構造と機能』二二五、二七五頁、中央公論美術出版、東京、二〇〇三年。
- (13) 『菅家文章』巻四「懺悔会作」。

(14) テキストは、小林芳規・武石彰夫・土井洋一・真鍋昌弘・橋本朝生校注『新日本古典文学大系』五六、梁塵秘抄・閑吟集・狂言歌謡、一七八・一七九頁、岩波書店、東京、一九九三年による。

(15) テキストは、黒川真道・山田安榮校訂『玉葉』第三、三三三頁、国書刊行会、東京、一九六九年、による。

(16) 宮次男『日本の美術』第二七一号、六道絵、二六〇四〇頁、至文堂、東京、一九八八年。

(17) たとえば『病草紙』の中の「白内障の男」では、白内障の手術を行なう様子が描かれている。白内障で混濁した水晶体を脱臼落下させるというこのような手術は、古代インドで行なわれはじめ、日本にもすでに平安時代末期には伝えられていたことが分かる。「白内障の男」では、男の目から大量に血が出ており、その血が用意されているたらいに向けてほとぼはしている様子が描かれている。しかしこのような手術で目から大量の流血があるとは考えにくい。この点については、浜松医科大学眼科学講座の堀田喜裕教授からご教示を得た。

(18) テキストは、前掲註5、小松茂美編書、八〇頁による。

(19) 小松茂美編『日本絵巻大成』（七 餓鬼草紙・地獄草紙・病草紙・九相詩絵巻）八〇・八一頁、中央公論新社、東京、一九七七年。

(20) 前掲註5、小松茂美編書、八〇・八一頁。

(21) 前掲註7、服部敏良著書、九八・九九頁。

(22) 荻野篤彦「病草紙にみられる疾患とその今日的意味」『病院図書館（近畿病院）』二〇一・二二、二〇〇〇年。

(23) 浜松医科大学皮膚科学講座の瀧川雅浩教授のご教示による。

(24) 基底細胞癌の事例についての研究としては、以下の論文をあげることができる。弓削真由美・新見やよい・矢島純・本田光芳・北原東一「耳介に発生した基底細胞癌」『皮膚臨床』四〇巻一号、二一八・二一九頁、一九九八年。松井美萌・錦織千佳子・宮地良樹・村上賢一郎「Nevoid basal cell carcinoma syndrome（母斑性基底細胞癌症候群）の二例」『皮膚』四一卷三号、三七三〜三七五頁、一九九九年。間山淳・松崎康司・熊野高行・原田研・玉井克人・花田勝美・四ツ柳高敏・鈴木唯司「下腹部から外陰部にかけて生じた巨大な基底細胞癌の一例」『臨床皮膚』五六巻一一号、九五八〜九六〇頁、二〇〇二年。播摩奈津子・真鍋求・津田昌明・河村七美・西巻啓子・安齋眞一「前頭部に生じた巨大な基底細胞癌の一例」『皮膚臨床』四六巻九号、一三二六九〜一三二七一頁、二〇〇四年。

- (25) 前掲註24、弓削真由美・新見やよい・矢島純・本田光芳・北原東一論文。
- (26) テキストは、山岸徳平校注『日本古典文学大系』一四、源氏物語一、二五七頁、岩波書店、東京、一九五八年、による。
- (27) 童子形(童子の姿)をした大人については、土谷恵『中世寺院の社会と芸能』吉川弘文館、二〇〇一年、を参照のこと。また、小山聡子「祭礼行列における童子の職掌——中世前期を中心として——」国文学研究資料館編『第二六回国際日本文学研究集会会議録 文化のなかの文学、文学のなかの文化——文学研究の可能性——』二〇五～二二八頁、国文学研究資料館、二〇〇二年、も参照していただきたい。
- (28) テキストは、森正人校注『新日本古典文学大系』三七、今昔物語集五、一三三頁、岩波書店、東京、一九九六年による。
- (29) テキストは、前掲註28、森正人校注書、一三〇頁による。
- (30) テキストは、前掲註28、森正人校注書、一三一頁による。
- (31) テキストは、前掲註28、森正人校注書、一三三頁による。
- (32) 小松茂美氏は、註5の小松茂美編書、八一頁において、寝そべって果物を食べようとしているのは女兒だとしている。しかし、このような振り分け髪は当時における男児にも頻繁にみられる髪型である。この子どもは、着ている衣の色や顔の表情から、男児だと推定できる。
- (33) 註6、加須屋誠論文。
- (34) 藤原道長の病状については、藤原実質の日記『小右記』万寿四年(一〇二七)三月二〇日条や同年一月二日条、同年二月二日条などに克明に記されている。
- (35) 西卷明彦・屋代正幸「「他者」の視点でみる『病草紙』」(日本歯科医史学会第三二回学術大会講演事後抄録)『日本歯科医史学会誌』二五巻三号、一四七頁、二〇〇四年、においては、「他者」とは「世間に入れないヒトたち」だと解釈されている。
- (36) 病氣と仏罰については、新村拓『死と病と看護の社会史』四八～六八頁、法政大学出版局、東京、一九八九年、において詳細に論じられている。

The Relation between the Contents of “Yamaizoushi” Picture Scrolls and Goshirakawa Houou’s Thought

Satoko KOYAMA

“Yamaizoushi,” depicting the “human way” of reincarnation in Buddhism, was ordered by Goshirakawa Houou in the latter half of the 12C. This paper deals with the relation between the contents of “Yamaizoushi” and Goshirakawa Houou’s thought. While earlier literature about “Yamaizoushi” emphasized its religious aspects, this paper suggests that “Yamaizoushi” actually lacks a sense of religion, because the accompanying texts are not related to any sutra, and the pictures are mocking sick people. The paper argues that these features originate from Goshirakawa Houou’s discriminative feelings towards the sick, which were actually typical for that time. The lack of sympathy may also be due to the fact that, as a noble, he hadn’t really experienced any hardships of human existence himself. In ordering such a scroll, Goshirakawa Houou was hunting for the bizarre. The paper claims these are the reasons why the “Yamaizoushi” picture scroll is so different from any other paintings depicting the “human way”.